

## sense of agency を育てる振り返り実践の研究

—子どもたちとの「振り返りの手引き」作成を通して—

坂倉 伊織\* 森脇 健夫\*\*

Iori Sakakura Takeo Moriwaki

### 【要旨】

近年、授業における振り返り活動は、めあての設定とともに実施率や認識率は高くなってきている。そのことは三重県による調査や、児童に対する振り返りに関するアンケート調査から明らかになった。しかし、実施はされていても、「振り返りの後回し化」などの実態があり、振り返りの質について議論されることは少ない。振り返りの質の低さにより、児童が振り返りをさせられているものと感じてしまい、学習者主体の活動であるはずの振り返りが、本来の役割を見失いつつあることが課題である。そこで、本研究では、振り返りの目的や意義、課題について明らかにしていくとともに、児童が sense of agency (主体的な感覚) をもった振り返り活動を行うことができるように「振り返りの手引き」を作成するための授業を行った。また、作成した「振り返りの手引き」を活用した振り返り活動を行い、児童の振り返りの変容を見た。

その結果、「振り返りの手引き」が児童の sense of agency を育てるための手助けとなりえることが明らかになった。また、振り返りを書くことそのものを苦手としている児童に対しても手助けとなりえる可能性が示唆された。

キーワード： 振り返り、振り返りシート、sense of agency

### I. 問題の所在

#### I-1. 授業における振り返りの現状と課題

筆者の勤務校では数年前から、めあてと振り返りを取り入れた授業実践を行うようになった。めあてにおいてはその特性上、授業の序盤に示すことが多く、授業で取り入れることをスムーズに行うことができるようになってきている。一方で、振り返りについてはいくつかの課題がみられる。私自身の授業でも振り返りは授業の終盤に行うことが多く、タイムマネジメントがうまくいかず、書かせっぱなしになったり、振り返りを行わなかったりということがあった。梶浦 (2019) は、このような実態の問題性を次のように指摘している。「なぜ、こうした『振り返りの後回し化』が行われてしまうのだろうか。その理由の多くは『指導

時間不足』である。しかし、本当の理由は時間不足ではなく、『振り返り学習』の優先順位の低さにある。『振り返り学習が必要だ』という教師の意識が高ければ、その部分を後回しにすることはない」。

上記の指摘は、私自身の振り返りに対する認識の低さが課題であること、また私だけではなく多くの教師が共通に抱えている課題であることを明らかにしている。また、小学校の研修委員長として校内の研修を組織する立場であったとき、校内児童の目指す子ども像の一つに「学んだことを振り返られる子」を位置付けた時もあった。もちろん、全体研修会とよばれる校内の教師で行われる授業研究においては、指導案上の学習活動に振り返りが位置付けられ、実践も行われた。しかし、事後検討会の場において、「学んだことを振り返られる子」の姿を教員間でイメージ化したり、深

\*三重大学大学院教職高度化専攻院生 \*\*三重大学大学院教育学研究科

めたりするまでには至らなかった。このことは、自身の認識がとりあえず振り返りをさせることという認識に留まっていたことが原因であると考えられる。

児童の側に立って見たときに、児童が決して振り返りをしたいと思っているようには思えなかった。このような実態は、今年度、児童に行った「振り返りに関するアンケート」の結果からも窺うことができる。(詳しい児童の実態についてはⅡ-1-2で述べる。) 例えば、「ふりかえりをするには役に立つと思いますか」の設問に対して、95.8%の児童が「はい」「どちらかといえば、はい」と肯定的な回答をしている。一方で、「授業のふりかえりをするのは好きですか」の設問に対しては57.4%程度に留まっている。「どちらかといえば、いいえ」「いいえ」と否定的な回答をした児童の理由として「面倒くさいところ」や「授業で学習したことをいちいち振り返らないといけないところがあまり好きではない」といったことがあげられた。このような実態は、自身の経験にもあるように、教師がとりあえず振り返りをさせることに意識を強くおいていたことが関係していると考えられる。

振り返り活動はあくまでも学習者主体の活動である<sup>注1</sup>。森脇(2021)は、「ふりかえりがいつしか形式的なものに堕ち、『ふりかえりでなく(教師がのぞむ) なにものか』にすり替わっていく可能性ですらある」ことを指摘しており、振り返りをすることが形骸化してしまえばそれは本来の振り返りとしての役割を見失ってしまうことを示している。児童が自分のために振り返りを行っているといった振り返り本来の役割を取り戻すためには、学習者の sense of agency<sup>注2</sup>を育てる必要があるのではないだろうか。そこで、教師も計画的に授業の中に振り返り活動を位置づけ、学習者も自らが主体的に振り返り活動に取り組んでいるという実感が得られるような実践を行い、考察を進めていく。

## I-2. 振り返り活動の意義や目的及び実態

ここでは、今日までの振り返りに関する動向を概観し、意義や目的について簡単に整理したい。

表1は、三重県教育委員会学力向上緊急対策チームが発行する教職員向けの学力向上通信(「三重の学-Viva!! (まなびば)」で示された「目標(め

あて・ねらい)の提示」,「振り返り活動」の実施率,児童の認識率を表したものである。平成28年の「授業における目標(めあて・ねらい)の提示」についての学校側の実施率を98.7%とし、その高さがうかがえる。また、児童の認識率は、88.7%であり、-9.9%の差はみられるものの、前年度における-14.8%の差と比べるとギャップを埋める点について改善がみられる。一方、「授業の振り返り活動の設定」においては、学校側の実施率は93.0%となっており、めあてと比べると低いことがわかる。また、児童の認識率については、76.9%とあり、差が-16.1%と実施における認識の乖離が課題として挙げられる。また、実施率は高い数値を示しているが、どのような振り返りが行われているかといった振り返りの質については問われていないことも課題として挙げるができる。

(表1)

	*授業の目標(めあて・ねらい)の提示*		*授業の振り返り活動の設定*	
	H27	H28	H27	H28
児童	83.0	88.8	71.4	76.9
学校	97.8	98.7	89.9	93.0
乖離	-14.8	-9.9	-18.5	-16.1

出典：学力向上通信 Vol.24「三重の学-Viva!! (まなびば)」

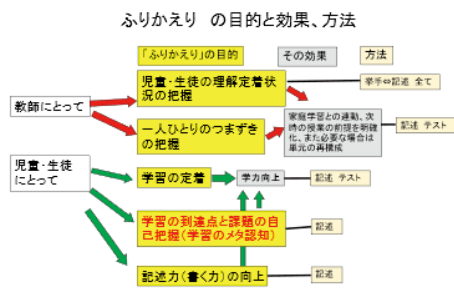
平成20年小学校学習指導要領総則(第4 指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項)において、「各教科の指導に当たっては、児童が学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりする活動を計画的に取り入れるよう工夫すること」の文言が追加された。また、国立教育政策研究所は平成25年度全国学力・学習状況の「クロス集計結果」を公表し、その結果から「授業の冒頭で目標(めあて・ねらい)を示す活動、授業の最後に学習したことを振り返る活動を積極的に行った学校ほど、教科の平均正答率、B問題(活用)の記述式問題の平均正答率が高い傾向が見られる」ことが明らかにされた。これらを受けて、振り返りが学力向上としての側面をもつことに注目が集まった。

この部分が強くクローズアップされ、各自治体においても、めあて、振り返りを意識した授業改善を行うことが示された。三重県においても、三重県教育委員会学力向上緊急対策チームが発行する教職員向けの学力向上通信の中で、『全国学力・

学習状況調査結果の「授業の最後に学習内容を振り返る活動がよく行われていた」と回答した子どもたちは、平均正答率が高い傾向にありました』という分析に着目し、「めあてとふりかえりを取り入れていますか」と題したコラムを書いている。

一方、森脇（2021）では、振り返りと学力向上との関連以外の側面にも目を向け、「ふりかえりの目的と効果、方法」として整理している。

（図1）ふりかえりの目的と効果、方法



出典：森脇（2021） p 384

この中では、「ふりかえりの主要な目的に自分の学習の到達点と課題を把握する学習のメタ認知があると考えられる」と述べられている。ここから、学習の理解・定着だけではなく、振り返りがメタ認知としての側面をもっていることに注目している。さらに、「ふりかえりの目的は自分で自分の学習の到達点と課題を正確に把握すること」と位置づけ、この力を「ふりかえり力」と命名している。森脇は、この「ふりかえり力」を高めるために、「ふりかえりの観点（例：わかったこと、できたこととわからなかったこと、できなかったこと、めあてに即してどうだったか、新しい気づき）を獲得すること、そして一方で振り返りの精度を上げること」の2つを挙げている。そして、「ふりかえり力」の発達と教師のはたらきかけについて「ふりかえりの6要件」として整理している。

### I-3. 学校現場で一般的に行われている振り返り活動の種類と課題

ここでは、学校現場で行われている一般的な振り返り活動について紹介する。そして、その振り返りについての課題点を明らかにするとともに本研究で扱う「振り返り」についての定義づけをする。そもそも振り返ることの形態は一様ではなく、

様々な形で行われている。授業の導入場面において、前時までの学習を確認したり、つながりのある単元について復習したりすること、授業の中盤で今まで学習したことを整理する活動なども広い意味で振り返りと捉えることができる。

本研究における「振り返り」を「授業の終末場面における記述式の振り返り活動」とする。

そこで、授業の終末場面において一般的に行われている振り返り活動とその課題について述べる。

一つ目は、数名の児童を指名して、話し言葉で振り返りを行わせる活動である。授業を受けて感じたことを感想として話させたり、学んだことを話させたりすることが多い。考えていることを書き言葉として表現することが難しい低学年において有効であり、振り返りの初期段階としては取り入れやすい活動である。一方で、数名の児童による発言になるため一時限における全員の振り返りを行うことは難しい。ペアやグループでお互いに聞き合い、振り返る方法もあるが、その場合、教師側が児童の振り返っている内容を把握することが難しくなる。

二つ目は、授業で学んだことを活用した応用問題として解かせる活動である。この活動は主に、算数科において行われていることが多い。算数科では教科書内でも必ずと言っていいほど本時の学習内容を確認するための応用問題が掲載されているし、その他問題集などの書籍からも容易に準備し用いることができる。森脇（2021）は「応用問題を解くことをふりかえりに代えて行っている実践はあるが、応用問題が解けるかは、ふりかえりの客観的な評価基準を与えることであって、ふりかえりそのものではない。ふりかえりはあくまで学習者主体の行為である」と述べている。ここから、応用問題を解くことを単体として振り返りとすることは難しく、問題を解かせた後に、そこから考えたことを書く活動などの学習者主体となる活動と組み合わせる必要がある。

三つ目は、振り返りシートを活用して、学習の理解度や学習態度について、段階別で選択して振り返らせる活動である。振り返る活動にかかる時間については先の2つの活動に比べれば、短くてすみ、話し言葉による振り返りと同様に、振り返りの初期段階としては取り入れやすいと言える。取り入れやすさから低学年においては振り返ることの意識づけとしては有効であると考えられる。一方で、自己を正確に捉えることの難しいとされ

る発達段階の児童には、振り返りとしての機能を十分に果たすとは言いにくい。

四つ目は、授業を受けた感想や学んだことをノートに記述させる活動である。筆者も日々の授業実践の中で多く取り入れてきた方法であり、小学校においてはポピュラーな活動であると言える。いつでもどの授業でも取り入れやすいのが良さである。記述式で書かせる活動であり、本研究とのつながりも多い活動である。一方で、児童側からすると、どうしてもノートのページ下部のわずかなスペースに書くことが多く、十分な記述量を保障することができずに終わってしまうことがある。また、振り返りの内容を見返すにあたって、複数のページにわたって見返す必要があり、活用のしにくさという点でも課題が残る。

このような課題から、本研究では、振り返りカードを活用した記述式の振り返り活動を行っている。

## II. 「振り返りの手引き」作成に向けた授業実践

### II-1. 研究協力学年と児童の振り返りに対する意識の実態

#### II-1-1. 研究協力学年の状況について

筆者は今年度、S小学校の専科教員を担当している。担当教科に第6学年の理科がある。そこで、本研究では第6学年2学級49名の児童を対象に調査を行う。なお、在籍学級児童の内、振り返りを記述することが難しい特別支援学級の児童は対象から除くこととした。

筆者はS小学校に在籍して8年目になるが、協力学年の児童は担任したことがなく、関わりの少なかった学年である。それにもかかわらず、最初の理科の時間に自己紹介をした時には、大学に通っていることや、みんなと研究をしていきたいことを伝えると、「すごい」や「いいよ」といった反応を示すなど、とても素直な児童たちであった。表面上は振り返りに関する研究を進めていくことに対して肯定的に捉えてくれているように感じる事ができた。しかし、実際に一人一人の児童が振り返りに対してどのように感じているかはわからなかった。そこで、児童に対して振り返りに関するアンケート調査を行った。そのことについて、次に述べる。

### II-1-2. 児童対象に行った振り返りに関するアンケート

実施時期：理科の年間実施計画の2単元目である『ヒトや動物の体』の単元に入る前に実施した。

2021年5月18日（2組）

2021年5月19日（1組）

実施方法：筆者がGoogleフォームで作成したアンケートを用いて実施した。児童は一人一台端末を活用して回答した。

協力者：第6学年児童47名（当日欠席した児童は対象から除いた。）

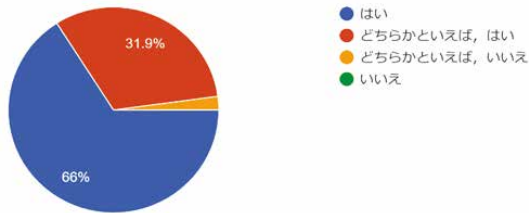
アンケートの回答項目は以下のとおりである。

- |  |
|--|
| <p>①学年</p> <p>②クラス</p> <p>③出席番号</p> <p>④名前</p> <p>⑤授業のふりかえりをしていますか。</p> <p>⑥授業のふりかえりをするのは好きですか。<br/>肯定的な回答をした場合<br/>ふりかえりのどのようところが好きですか。<br/>否定的な回答をした場合<br/>ふりかえりのどのようところが好きではないですか。</p> <p>⑦自分で書いたふりかえりを後で読み返すことはありますか。</p> <p>⑧ふりかえりをするのは役に立つと思いますか。<br/>肯定的な回答をした場合<br/>どのような点で役に立つと思いますか。<br/>否定的な回答をした場合<br/>どのような点で役に立たないと思いますか。</p> <p>⑨めあてにそったふりかえりをしていますか。</p> <p>⑩ふりかえったことを次の学習にいかしていますか。</p> <p>⑪ふりかえりに対して先生は、丸付けやコメントをしてくれますか。</p> <p>⑫ふりかえりをするときに難しいと感じるところはどういうところですか。</p> <p>⑬ふりかえりのある授業とない授業のちがいは感じますか。<br/>肯定的な回答をした場合<br/>どのようなちがいがありますか。</p> |
|--|

アンケート結果から、児童の振り返りに関する

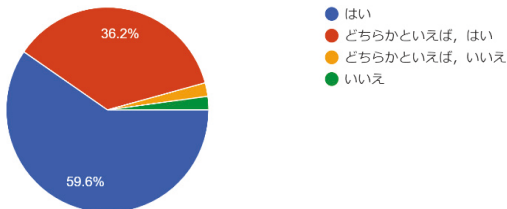
意識において特徴的だと筆者が感じた項目について考察を加える。

授業のふりかえりをしていますか



授業の振り返りを行っていると感じている児童が 97.9%いる。これは、筆者が予想していたより高い数値である。これまでの本校での取組や担当された教員の日常的な取組からこのような数値が出たと考えらえる。

ふりかえりをするのは役に立つと思いますか



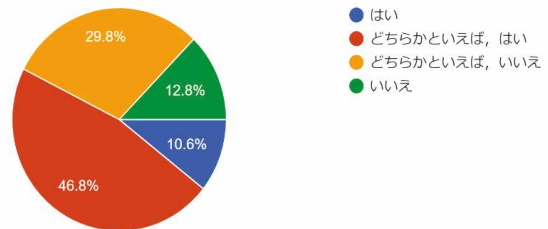
振り返りをするのが役に立つと考えている児童は 95.8%いる。多くの児童が何らかの視点で役に立つものであると考えているのである。質問に対して「はい」「どちらかといえば、はい」と回答した児童の回答理由の一部を以下に示す。

- ・ふりかえりを書いて見返して復習ができたところ。
- ・自分のそのとき学習した内容を自分なりに答えられるところ。
- ・忘れないように学習したことを書いて覚えておけるところ。
- ・前の振り返りを見直すことができ、どこが成長したかが確かめることができるところ。
- ・次はこんなことを調べたいなど見通しをもてる場所。
- ・その時の失敗や成功を振り返って、次どのようにすればいいのか活かされるから。

振り返りを役立たせるものとしてみたときに、授業で学習したことの思い出しに活用したり、テストのための学習に役立てたりできると考えている児童が多い。また、「自分」という言葉を使い、

わからなかったことやその時に考えていたことや成長など自分なりの表現ができることに良さを感じている児童が多い。

授業のふりかえりをするのは好きですか



振り返り活動を好きだと肯定的に捉えている児童は 57.4%おり、否定的に捉えている児童は 42.6%いる。振り返り活動を行っていても、その活動を好意的に捉えているかどうかにはバラつきが見られた。

質問に対して「はい」「どちらかといえば、はい」と回答した児童の回答理由の一部を以下に示す。

- ・復習に役立つ。
- ・授業で学んだことを覚えるのに役に立つと思います。
- ・自分の考えを深められるから。
- ・その時自分がどこまで学習をできていたか、わかるようになるため。
- ・その授業で自分が考えていた事が分かるから。
- ・学習したことを自分なりに答えられること。
- ・自分のわからないところがわかるから。
- ・これからどのように学んでいけばいいかわかるから。
- ・テスト勉強をしたときに「このときに覚えた」ということがわかるから。
- ・後から思い出すことができる場所です。
- ・意見が変わったときに前までどう思っていたか見返して思い出せる場所です。
- ・文を書く練習になるから。
- ・生徒がどう思っているのか先生が見れるから。

振り返りによって授業で学習したことを復習できることに良さを感じている児童が多くいる。また、授業の内容やその授業で自分が思っていたことなどを思い返すことに良さを感じている児童が多くいる。一部の児童ではあるが、他にも学習したことを覚えることや、自分が成長したことを

確かめること、失敗したことを書いておき、次に活かすことやそれをもとに見直しをもって調べ学習など自主的な学習に取り組めることに良さを感じている児童もいる。

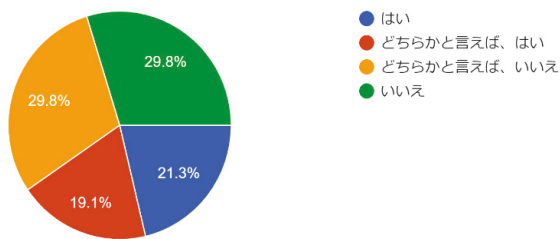
質問に対して「どちらかと言えば、いいえ」「いいえ」と回答した児童の回答理由の一部を以下に示す。

- ・面倒くさいところ。
- ・授業で学習したことをいちいち振り返らないといけないところがあまり好きではない。
- ・上手く言葉をまとめるのが難しいから。
- ・何を書いたらいいかわからない。

振り返りを好意的に捉えている児童の多くが、振り返りの良さに着目して理由を述べているのに対して、否定的に捉えている児童には、「面倒くさい」といった情緒面に関する理由が多く見られた。回答理由の「いちいち」という言葉から、振り返りを「させられているもの」と感じているとも読みとることができる。この「させられているもの」と捉えている児童の実態をいかに「自分のために」振り返りをやっているという **sense of agency** を育てることができるかが本研究における課題である。

また、「まとめるのが難しい」や「何を書いたらいいかわからない」といった回答から技能面において振り返ることに対する困難さを示している児童がいることもわかる。

振り返りのある授業とない授業のちがいは感じますか



振り返り活動のある授業とない授業の違いについては、半数以上の児童がその違いを感じることができていない。つまり多くの児童にとって振り返り活動はあってもなくてもさほど変わらないものと考えていることがわかる。また、指導者の視点から考えてみると、振り返り活動を児童にた

ださせているものになっており、児童にとっては授業とのつながりを感じることができないものとなっているのである。ここでも、児童が **agency** を意識した振り返り活動を行っていくことで、主体性のある授業へと変化させていけるかが課題である。

児童にとって振り返り活動は身近なものになっている。実施率も高く、役に立つものであるという実感においても高い数値を示している。一方で、振り返りをすることが好きかと聞かれれば、否定的に捉えている児童も少なくない。このような差はどこからうまれてくるのだろうか。否定的な回答をしている児童の多くは面倒くさいと回答している。ここから、面倒くさいという思いを覆すほどの効果を実感できるという強度が今の振り返り活動の実情には無いのではないかと考えられる。面倒くさいという言葉からマイナスのイメージもつが、実は振り返りをすることは人間にとって容易なことではない。青砥 (2021) は、神経科学の視点から、内省することの難しさを次のように捉えている。「神経科学的にみると自分に意識を向ける行為は決して簡単ではありません。理由は 2 つあります。ひとつは、人間以外で内省ができる動物はほぼ皆無だと言われているくらい高度な脳機能であり、それだけ脳への負担が大きいためです。内省を行うときの司令塔となるのは前頭前皮質で、人が『自己と向き合う』ときに脳内でなにが起きているかということ、前頭前皮質の後方にあるすべての脳の部位を対象に、情報を検索したり、動かそうとしたりするのです。だから多くの人は内省をしようとしても、脳が疲労することを敬遠して自然と思考を止めがちなのです。もうひとつの理由は第 1 章で述べた人間の意識の限界です。外部情報（五感から入っている情報）の処理をするだけでも人の意識は常にひっぱりだこの状態なのに、わざわざ外部情報を遮断して内なる自分に意識を向けることは、文字通り『意識的に』やらないとなかなかできることはありません」。

そこで、児童が面倒くさいという困難さを乗り越え、振り返ることを主体的に行い自律的な学習につなげるために、意識的な振り返りの場を保障していくことは重要である。他にも、どのように書けばいいかわからないといった書くことに対して苦手意識をもっている児童もいる。このような児童に対しては、視点を意識した振り返り活動を継続して実施していくことが重要である。

### II-1-3. 振り返り活動の実際

アンケート実施後の『ヒトや動物の体』の単元から、振り返りカードを活用した振り返り活動を実施している。今隆史(2020)では、『省察的な態度』五つの要素として振り返り実践を行っている。本研究では、この五つの要素をもとに小学校6年生児童にも分かりやすい表現で振り返りの視点を設定した。

<本研究で設定した振り返りの視点>

- ①学習に取り組む態度はどうだったか。
  - ②友だちの考えと比べて発見したこと。
  - ③自分の学び方の良かったところ。
  - ④わかったこと。わからなかったこと。
  - ⑤もっと考えてみたいこと。
- (今隆史(2020)の「振り返り」に必要な視点をもとに筆者が作成)

5つの視点を設定した振り返りカードを活用して、授業終末の5分間程度の時間で振り返り活動を行っている。

<実際に使用している振り返りカード>

**振り返りカード**  
年 級 様 所

①学習に取り組む態度はどうだったか。	②友だちの考えと比べて発見したこと。
③自分の学び方の良かったところ。	④わかったこと、わからなかったこと。
⑤もっと考えてみたいこと。	

日・時	月	日	

児童は、振り返りカードの上部に記載されている振り返りの5つの視点を参考に振り返りを行っていく。振り返りの視点については、1つの視点から振り返っても、複数の視点で振り返ったりしてもよいこととした。1日分で書ききれなかった児童については、2日分の枠にわたって書いても

よいこととした。カードの右部分の白枠については、授業者である筆者から毎時間コメントを記入した。

<児童の振り返りの内容と教師のコメントの例>

5月26日

口の次に食道、胃、小腸、大腸、こう門の順番だということを知りました。消化管は9mもあることを知りました。小腸は7mもあって消化した栄養を吸収していることも知りました。体の中には、たくさんの栄養をとり入れていることも知りました。

<教師のコメント>

知ることばかりですけど、自分なりに表現しなおすのが得意ですね。

5月24日

どうなるかたのしみです。

<教師のコメント>

たのしみにしてくれてありがとう。(児童名)が考えていること、どんどん教えてね。

最初の単元である『ヒトや動物の体』の授業においては、児童の振り返りが視点にそった振り返りになっていなくても児童が肯定的に捉えることができるようなコメントを心がけた。そのことで振り返りをするそのものを肯定的に捉えられるようにした。

継続的な振り返りを通して、振り返り方に顕著な変化が見られた児童Aの振り返りの変容を追いつながりこまでの振り返り活動についての考察を行う。

<児童Aの振り返り>

『ヒトや動物の体』

5月26日

今日わかったことは、「消化」、「消化液」の2つのキーワードです。この2つのはたらきについてもっと知りたいと思いました。

『植物のつくりとはたらき』

6月21日

自分は予想があっていたので、それについて、もっと考えていきたいと思います。

6月23日

今日習ったことの3つの言葉を使っていきたいと思います！！3つの言葉の意味をはっきりわかって、使いこなせるようにしたいです。

『生物どうしのつながり』

7月12日

調べ方は、び生物からたどっていくのか、ライオンなどの生物から調べるのかどっちなんですか？食物連さの「さ」をおしえてください。

最初の単元である『ヒトや動物の体』の単元の時には、振り返りを書く量はそこまで多くはなかったが、学習したことが「キーワード」として具体的に残されている。また、自身が知りたい事についても「2つのはたらき」として具体的に書かれている。初めて振り返りカードを活用した単元であるためか、Aの振り返ることに対する意欲を感じることができた。

次に、2つ目の単元となる『植物のつくりとはたらき』の振り返りである。6月21日の振り返りの「それ」や6月23日の振り返りの「習ったことの3つの言葉」に注目したい。前単元のキーワードとして記しているものと比べるとやや抽象的な表現となっている。児童が自分のために書いているという意識をもつためには、後で自分が見直したときに、わかりやすいものになっているかは欠かすことができない点である。

さらに、3つ目の単元なる『生物どうしのつながり』を見てみると「どっちなんですか？」や「おしえてください」という言葉が記されている。Aが知りたいという思いをもつことは、学習意欲という面から見ると大切なことである。一方で、本来学習者自身のための振り返りが、いつしかAにとって教師とのやり取りをするためのツールへと変化してしまっているのである。

Aのように教師とのやり取りを求める内容になっている児童は多くはないが、具体性がなく、後から自分が見なおしたときにわかりにくい振り返りになってしまっているものも目立った。

Aの振り返りを中心に、その他の児童の振り返りを見直すなかで、児童が agency を意識した振り返りとはなっていないことを感じた。児童が agency を意識し、自分のために振り返っていきけるようにしていくための手立てが必要である。

## II-2. 授業実践の目的

児童が agency を意識した振り返りを行っていくためには児童が自分のために振り返りを行っていることを認識する必要がある。また、教師側も、もう一度、振り返り活動とは学習者主体の活動であることを認識し直すべきである。一方で、振り返りの内容の信頼性や精度を高めていくためには、自分本位な振り返りを続けていくのではなく、他者による評価を手助けとする必要がある。つまり、振り返りに関する教師の助言が、児童の振り返りの信頼性や精度を高めていくために必要である。

これらのことから、児童自らが振り返りを行っているという思いをもたせながら、振り返りの内容の信頼性や妥当性を高めていけるような手立てを考えていく必要がある。

そこで、本研究では、児童とともに、自分たちにとってより良い振り返りを目指すことができる「振り返りの手引き」を作っていく。また、作成した「振り返りの手引き」をもとに、児童に振り返り活動を行わせていく。

## II-3. 実践の仮説

自分や学級の他者が書いた振り返りを読み、良さや課題について考える活動を行うことで、学習者にとって必要感のある振り返りとなるための「振り返りの手引き」を作ることができる。そして「振り返りの手引き」を参考に振り返りを書いていくことで agency を意識した振り返り活動を行うことができる。

## II-4. 「振り返りの手引き」作成のための授業実践

### II-4-1. 実施時期と実施の方法について

実施時期

令和3年10月12日 6年2組

令和3年10月13日 6年1組

どちらのクラスも、理科の5つ目の単元となる『水溶液の性質』の学習の前に行った。

実施方法

2クラスそれぞれで授業を行った。授業は理科の授業時間を使い、筆者が行った。



## II-4-2. 授業の展開について

題材名

「振り返りの手引き」をつくろう

本時の目標

自己の振り返りや他者の振り返りを読み、その良さや課題について出し合い、「振り返りの手引き」作成にあたっての要件を考えることができる。

学習活動

①学習の流れをつかむ。

ここでは、学習の流れをつかむために、本時でやることを伝え、めあてを設定した。

めあて

自分たちにとって、良い、使える、やってよかったと思える振り返りについて考えよう。

②自分の振り返りを読んで、良さや課題について考える。

ここでは、自分の今まで書き溜めてきた振り返りを読み返させ、良さや課題に目を向けさせた。

③班で振り返りを読み合い、良さや課題について考える

自分の振り返りを読んだときと同様に班の児童の振り返りを読ませ、良さや課題を探す活動を行った。

④他の班の board を読み合う。

ここでは、他の班の board を見させた。今後自分が振り返りを書いていく上で活かすことができるように書かれているかというポイントで読ませた。

⑤まとめをする。

今回の授業で考えを出し合うことがゴールではなく、できた「振り返りの手引き」を今後使っていくことが大切であることをおさえた。

## II-4-3. 授業の実際及び考察

児童一人一人が振り返りを見返し、その振り返りをより良くしていくことについて考え直す機会をつくろうと Googlejamboard を活用した授業展開を選択した。児童が考えた意見に対して一人一人挙手を求め、黒板上で整理しておくことも考えられたが、時間の関係上発言の機会が限られてしま

うこと、学級の中で声を出すことに苦手意識を持っている児童の表現の場をつくることを考慮し、Googlejamboard を使用した。

また、Googlejamboard は児童らの同時編集を可能としており、一人一人が自分の意思を反映しやすいものとなっている。さらに編集も容易で意見の追加や修正もその場で随時行っていける。実際の授業場面においても、「次の授業で活かせる」と書かれていた付箋に対して補足を求める場面があった。

T：今 4 班さん見ているんですけど「次の授業で活かせる」ってあるね。これ当然いかせるんだらうけど、どういう風にして書いていけばいいかわかる？

C：活かせるから？

T：活かせるようにどう書いたらいいの？君たち次の授業にいかせるように書いている意識ある？どういうことに気をつけると次の授業にいかせるの？

C：その日ならったことのまとめを書く。

T：2 班のとこだね。2 班の所に加えておいてくれる。その日ならったまとめを自分で書いてみるということ？まとめを自分なりに書くとわかりやすい。次の授業に活かせる。じゃあ A さんそれ書いておいてください。

その後、別の付箋で「今日のまとめができる」と追加された。

本時の授業では、めあてを「自分たちにとって、良い、使える、やってよかったと思える振り返りについて考えよう。」とした。児童が振り返りの内容面からその良さ課題について考えられることをねらいとして設定したが、児童には考えにくいものとなっていた。例えば、「紙は捨てない限りならない」や「前の授業の復習になる」といった付箋の内容もあり、内容面での良さではなく、振り返り活動そのものの良さと混在してしまっているものがいくつかあった。めあての文言では十分にその意図を汲み取れるものではなく、今後改善が必要な点である。

本時では活動の流れを「自分の振り返り」→「班の人の振り返り」→「他の班の board」と設定し、徐々に参考とする範囲を広げていくようにした。作成された board や児童の反応から「班の人の振

り返り」を読むという活動が非常に重要であったと考えられる。日々の授業では、自分の振り返りを読み返すことはあっても、お互いの振り返りを読むことはない。今回が他の人の振り返りに触れることができる初めての機会であった。作成された board から「自分が疑問に思った事を調べようとしていることは大切だと思うので、素敵だと思いました。」というように、他者からの気づきがあったことがわかる。

一方で、「他の班の board」から考えていくという活動には課題が残った。

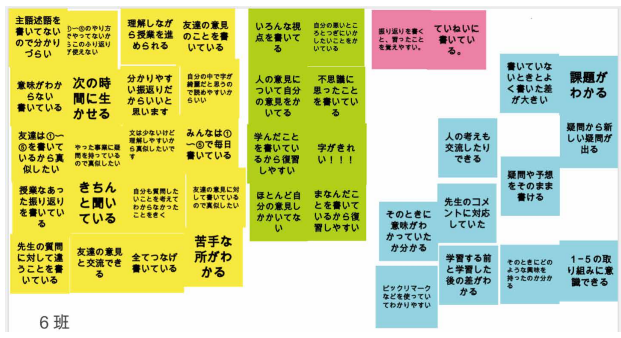
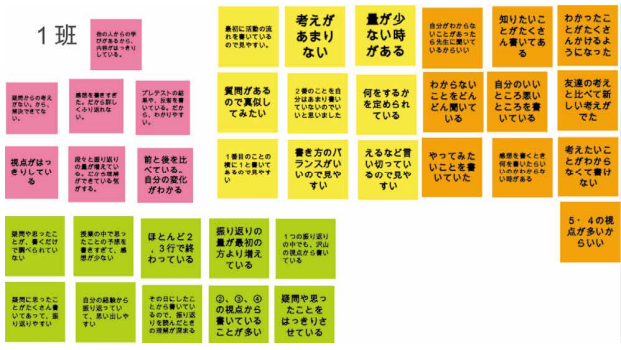
T: 皆さんも (board を) ちょっと動かしてもらってもし意見があれば教えてください。どうですか。実際に他の班の見てもらって大丈夫です。おたずね何かあれば。(沈黙がつづく。)

T: 先生からいいですか? 「量が少ない時がある」というのはこれは使えないという意味ですか? 使えるという意味ですか? 先生今1班見ているんですけど。1班ここだけ? 黄色は誰? 量が少ないときがあるというのはもう少し(詳しく)書くといいよね。

「他の班の board」を見て考えるという活動について説明を終えたあと、教師は児童におたずねという形で質問をすることを促している。促した後、児童からの反応がなかったため、指導者は自ら質問をしている。質問の仕方がわかっていない児童のために質問の例を示すことを意図して行ったことではあるが、児童がお互いに質問をしあっていくという雰囲気を作るためには少し時間をかけて児童からの質問を待つ必要があった。その後もいくつか児童でお互いに質問をしあう場面があったが、教師が口をはさむ場面も多くなってしまっていた。

本時を実施した時期が、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、各校に緊急事態宣言が出されていた。そのため、グループで話し合うという活動を作ることができなかった。班で机を組み、付箋に書かれている言葉が振り返りを改善していけるものになっているのかを話し合うことができればもう少し児童たちでお互いに質問を出し合う場面を作ることができたと考えられる。

<授業で児童が作成した board>



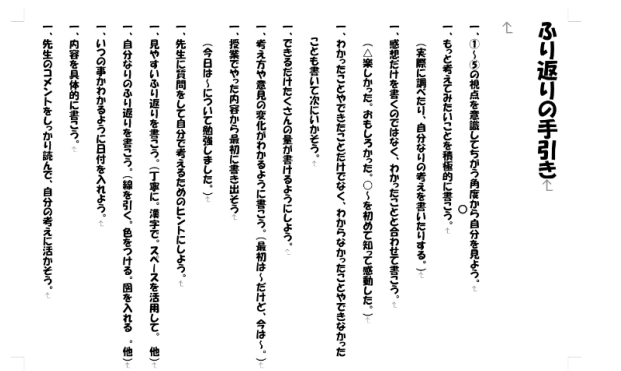
II-5. 作成した「振り返りの手引き」とその活用について  
II-5-1. 「振り返りの手引き」

以下に示すのが、「振り返りの手引き」作成のための授業をもとにつくられた各クラスの「振り返りの手引き」である。

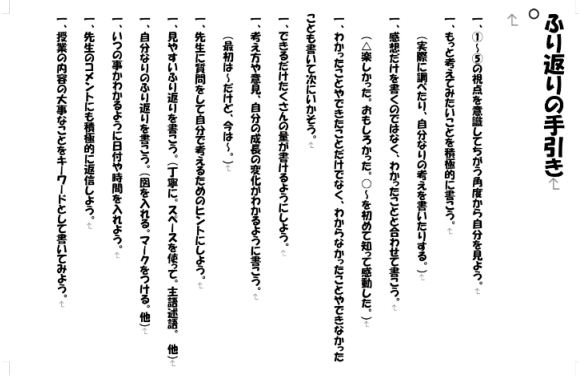
「振り返りの手引き」の作成にあたっては、児童が授業で作成した各班の board をもとに児童の意見を筆者がグルーピングしてまとめた。グルーピングしたときの言葉が抽象的なものについては、児童にとってわかりやすいものとなるように( )の中に、具体的な内容を示すようにした。

例 自分なりの振り返りを書こう。(線を引く。色をつける。図を入れる。)

<1組の振り返りの手引き>



<2組の振り返りの手引き>



II-5-2. 活用の実際

作成した「振り返りの手引き」は、A4サイズに印刷し、ラミネートをかけ、児童一人一人に配付した。児童は振り返りファイルに保管し、振り返り活動を行うときに見ながら振り返った。

教師は、A3サイズに印刷し、ラミネートしたものを持っている。振り返り活動の時間のときに黒板に掲示し、児童が振り返る際に参照することを促した。

II-6. 児童の振り返りの変容

「振り返りの手引き」の活用における児童の変容について2人の振り返りの内容から考察を行う。まず、先にあげたAの振り返りである。

『水溶液の性質』

10月20日  
 塩酸→塩化水素の所の「塩化水素」という新しい言葉が出たので、自主学習で調べたいと思います。炭酸水の中に二酸化炭素が入っているのにおどろいて、今度から、炭酸飲料をのむときに、10月20日の授業で、炭酸のことやったなあ～と思い出したいと思います！  
 自分で気づいたのが、アルカリ性が赤のイメージをもっていたことです。アがつくとどうしても、赤のイメージをもってしまうので、きをつけたいと思いました。ぎゃくに酸性は、漢字をつかっているから、暗いイメージをもっているから、前のふく習プリントをまちがえたことに気がきました。テストの前にきつけてよかったと思います。3限目の態度は、

ノートもかけていたし、内容も、頭に入っていたので、態度はよかったです。

Aは1組の児童である。1組が考えた「振り返りの手引き」と照らし合わせて見る。まず、はっきりとわかる点は、振り返りの量が増加している点である。ほとんどの振り返りが1日分の枠におさめて書いていたのが、この単元から複数の日の枠にまたがって書くようになっていく。また、振り返る量が増加したことによって複数の視点をもって振り返ろうとしていることがわかる。さらに、「塩酸」や「アルカリ性」などの本時のキーワードとなる言葉が使用され、内容の具体性についても意識していることがわかる。特に具体性が表れたことによって、「イメージをもっている」や「まちがえたことに気がきました」というようにAの思考の内面がはっきりとしてきている。

次に、Bの振り返りである。Bは5月の振り返りに関するアンケートで、「授業のふりかえりをすることは好きですか」の設問において「どちらかといえば、いいえ」と否定的な回答をしていた児童である。

『水溶液の性質』

11月2日  
 今日は、きのうの実験のまとめをしました。きのうは「レモン色のこげと粉を磁石に近づける」と「こげと粉をもう一度塩酸につける」ということをしました。この授業のはじめに、「きのうは何の実験をした？」ときかれて、ふり返りを見たけど、書いてなくて困りました。なので、これからは次の学びにつなげるために、今日したことと分かったこと、分からなかったこと、疑問などをくわしく書きたいと思いました。もっとかつようできるふりかえりにしたいです。粉の正体ですが、専門的なことになってあまりよく分かんなくなってしまうので、自分で疑問に思っときながら「難しいな」と思ってしまいました。(どれがどれか分からなくなってしまうので)塩酸は鉄をちがうものにしてしまうなんて、すごいと思いました。6限目の活動では、ブルーベリーをつぶした汁をA～Eの水よう液に入れるという実験をしました。汁を入れると、色がCとEだけみどりっぽく変色して、おどろきました。さらに身の周りにあるもの

で、リトマス紙のように何性かを調べられると分かり、理科は生活とつながっているんだと思いました。

Aの振り返りと同様に、振り返りの量の増加や、キーワードの使用、振り返りの視点を複数使用している点などに変化が見られる。Bの振り返りで特に特徴的であるのが、「授業はじめに、『きのうは何の実験をした?』ときかれて、ふり返りを見たけど、書いてなくて困りました。なので、これからは次の学びにつなげるために、今日したことと分かったこと、分からなかったこと、疑問などをくわしく書きたいと思いました。」という記述である。Bは実際の授業場面において振り返りを活用しようとしていることがわかる。実際には、授業についての具体的な記述がなされておらず活用するには至らなかったようだが、困った経験については残されている。そして次回以降の「学びにつなげるために」という自身の目的意識をもった振り返りに変化させていきたいことを示している。

### II-7. 仮説の検証

できあがった「振り返りの手引き」を見てみると、どちらのクラスの手引きも筆者があらかじめ予想していたものよりも多くの視点から具体的にagencyに迫ろうとしている。それは、自分たちの手元にある具体的な振り返りをもとにして考えられたからに他ならない。児童は作成に至るまでに3単元分にわたる振り返りを理科で毎時間書き溜めてきていた。その蓄積がなければきっとここまで具体的な視点は出されなかったであろう。

agencyを意識した振り返りについては、Bの振り返りが参考になる。「振り返りの手引き」が「自分たちにとって良い、使える、やってよかったと思えるふり返り」を目指して作られているため、Bは「もっと活用できるふりかえり」を目指している。

AやBほど顕著に変化が表れている児童は多くない。しかし、「振り返りの手引き」を活用し、振り返りの量が増加したり、キーワードを用いて具体的に書こうとしたり少しずつ内容に変化が見られる児童は増加している。今後も継続的に「振り返りの手引き」を活用した振り返り活動を続けていくことで児童一人一人が自分のために振り返りを行っていくことを期待したい。

### III. 成果と課題

教師は振り返り活動をただ行っているだけという現状や、児童も振り返りをさせられているだけで決して振り返りをしたいと思っていないのではないかといった問題意識から本研究はスタートした。

AやBの振り返りの内容からはまさに振り返りに自分から関わり自分のために書こうとするsense of agencyを感じる事ができた。さらに実際には、児童のアンケートの「授業でふりかえりをする事は好きですか」の設問で、否定的な回答をした児童の中の、「書くこと」に苦手意識をもっていた児童に「振り返りの手引き」が活用されていた。具体的には、「どう書いたらいいかわからないときに役に立つ」というように、書き出しのハードルを下げるために機能していたのである。また、「国語や算数で使える」といった教科を超えた汎用性についての可能性についても示唆された。

一方で、まだ、「毎回振り返りをするのがちょっと面倒だから」といった意見をもっている児童が一部いる。このような児童のsense of agencyを育てるためには、振り返りが活用できている実感が必要である。そのために、このような考えをもっている児童を対象に、「振り返りの手引き」の活用の仕方を詳細に分析し、助言をしていくことが考えられる。今後も、継続した振り返り活動を行っていく中で、一人一人のsense of agencyを育てていきたい。

注1) Bandura (2001) は、「自分の考えや行為を省察するメタ認知能力が人間の行為主体性の特徴の1つである」と述べている。メタ認知能力(ふりかえり力)と主体性に密接な関係があることがわかる。

注2) 文部科学省はsense of agencyを「自ら考え、主体的に行動して、責任をもって社会変革を実現していく姿勢・意欲」としている。Agencyという単語はOECDのEducation2030で打ち出した概念であり、日本語だけではなく、他言語にも対訳がないと渡辺は述べている。

リクルート進学総研 教育トピック「教えて!『OECDが打ち出したエージェンシー』とは」渡辺敦司(2019)

[http://souken.shingakunet.com/career\\_g/2019/09/post-b7a2.html](http://souken.shingakunet.com/career_g/2019/09/post-b7a2.html) (20211125 確認)

引用・参考文献

- ・梶浦真著 小林和雄監修 (2019) 〈主体的・対話的な深い学びを実現する〉【振り返り指導】の基礎知識—質の高い授業づくりを支える理論と実践— 教育報道出版社
- ・工藤勇一, 青砥瑞人 (2021) 最新の脳研究でわかった! 自律する子の育て方 SB クリエイティブ
- ・今隆史 (2020) 中学校社会科における授業の振り返り—省察を促すための「五つの要素」と「二つの視点」—指導と評価 第66巻 12月号 日本図書文化協会/日本教育評価研究会
- ・三重県教育委員会 「学力向上緊急対策チーム」 (2014) 学力向上通信創刊号「三重の学-Viva!! (まなびば)」
- ・三重県教育委員会 「学力向上緊急対策チーム」 (2016) 学力向上通信 Vol.24 「三重の学-Viva!! (まなびば)」
- ・森脇健夫 (2021) 授業におけるふりかえりの実践的研究 三重大学教育学部研究紀要 第72巻
- ・文部科学省国立教育政策研究所 (2013) 平成25年度全国学力・学習状況調査クロス集計結果
- ・文部科学省 平成20年学習指導要領総則